

「研究ベース型高等教育」の再興

— 学習支援と図書館の役割について 初年次教育と研究の融合 —

The revival of research database type college education.
— Fusion of the first annual Education and research , about the role of study support and a library —

入 江 良 英
(こども学科 特任教授)

要旨 本論では「知識基盤型社会」で必要とされる(短期)大学の学習支援と図書館の役割について考えてみたい。しかし同時に、今までは、高等教育に進まなかった層の学生をどう支援していくかという、教育的病理の問題も同時に取り使わねばならない。それは「開発的支援」と「臨床的支援」を同時にめざさねばならないことを意味する。意識的次元である「形式知」と無意識的次元である「暗黙知」の統合が、学生においても研究者においても試みられるだろう。そういう中で「学習支援」と「(短期)大学図書館」の果たすべき役割を、膨大な情報を取り扱う「ビッグデータ」の問題とも重ね合わせながら考察してみたいと考える。

【キーワード：知識基盤型社会 学習支援 ICT 研究データベース型高等教育 ビッグデータ】

1. はじめに

「知識基盤型社会」と現在の「(高等)教育の病理的問題」について

まず、「知識基盤型社会」とは何かを考えてみよう。平成17年の中央教育審議会答申「わが国の高等教育の将来像」によると、以下のことが述べられている。

- ① 知識には国境がなくグローバル化が一層進む。
- ② 知識は日進月歩であり、競争と技術革新が絶え間なく生まれる。
- ③ 知識の進展は、旧来のパラダイムの転換を伴うことが多く、幅広い知識と柔軟な思考力に基づく判断が一層重要となる。
- ④ 別や年齢を問わず参画することが促進される。

以上のような基礎的見解に基づき、「新しい能力論」が導き出されたのである。「新しい能力」を語る際に重要なことは、この知能が、(A)「水平的(要素的)な次元」(形式知)と(B)「垂直的な次元(深層的―表層的)」(暗黙知―形式知)との両方の性質をもっているということを知ることである。その意味でも、①「生きる力」(文部科学省 1996)、②「リテラシー」(OECD-PISA)、③「人間力」(内閣府 2003)、④「キー・コン

ピテンシー」(OECD=DeSeCo 2006)、⑤「就業基礎能力」(厚生労働省 2004)、⑥「社会人基礎力」(経済産業省 2008)、⑦「学士力」(文部科学省 2008)、⑧「エンプロイアビリティ」(雇用される能力)(日経連 1999)等の詳細な諸概念をじっくり検討することを試みねばならない。これらの事は紙面の関係上、別の機会に譲りたいが、以下の事だけは、ぜひ述べておきたい。

これまで日本人は、「集団・人間主義」を重んじてきたために、教育場面においても、「収束的思考(分析的思考)を重視し、「拡散的思考(イメージ・直観)」を重要な要素とする「創造的教育」を、集団のまとまりや構造を崩すものとして、どちらかといえば軽視してきた。だが変革期としての現代は、文化をより国際的で高次なものにせねばならない段階にきている。つまりこれが、「創造性重視の立場」であり、「メタ認知」「反省的実践」「判断力」「解釈力」など、PISA等により、重要とされるものである。

「創造的研究」は、「新しい能力」の重要な部分である。「進化」を促す力としての創造性研究を行いたいと考えるが、このような教育改革を求める立場に反対の立場は、現在においても、教育現場においてもまだまだ強い。このような立場を代弁する教育社会学者、刈谷剛彦の、次のような意

見もあることは忘れてはならないだろう。

「入学試験全般を罪惡視し、忌避するという感情に導かれることによって、私たちは、教師が知識を教えることを、知識の『詰め込み』とみなすようになった。しかも、学歴は肩書だけで実力とは結びつかないという学歴社会の神話に囚われることによって、私たちは『学校が伝達する知識は役に立たない』という知識無用論を何の検証もなしに受け入れてきた。受験にしか役立たないとみなされる知識を教えることは、詰め込み教育である。そういった『学歴社会＝受験教育』への反動が、過度の知識輕視を生み出してきたのである。その結果、『詰め込み教育』のラベルを貼られないようにと、子どもへの『指導』ではなく『支援』こそが教師の役割だという考えが『新しい学力観』のもとで導入され広まった。しかし、とりわけ小学校レベルでそれが行き過ぎた面もあり、学習における理解や定着をおろそかにする風潮を一部で生んでしまった。」^{注1}

刈谷氏の意見は、確かに基礎学力を培うために適切ではあるが、それにしても日本のこれまでの教育は、あまりにも厳格な「教科主義」「拘束的思考」を採っていたのではなかろうか。本論では、その状況を反省し、やはり総合的学習を伸ばす「創造性」「拡散的思考」を、新しい改革教育の出発点としたい。そういう教育こそが、時代の進化を促し、「新しい能力」「新しい科学」を導くであろう。この論の補完として、東大先端科学技術研究センターと日本財団が進める『異彩発掘プロジェクト』を行う、中村賢龍東大先端研教授の意見を挙げておく。

「日本の学校教育はオールマイティーで協調性のある人間を育てるには適していたが、それではイノベーションは起きない。適応教室などでは満足しきれない子がとがった牙を磨く教育の場を作りたい。」^{注2}

日本の教育は、以上のような大きな転換期を迎えているが、それと同時に、大きな教育の病理的問題になっているのが、以下の問題である。今まで高等教育機関に進学しなかった層が、大量に大学へ進学するようになったことや核家族化の進行による家庭教育や地域共同体の消失による地域の教育力の弱体化などから、大学での教育に適応できない学生が増加していることは、最大の教育病

理的問題である。

このような状況から、学生の大学教育への不適応への対応として、「初年次教育」(first-year Experience) が、ほぼ全ての(短期)大学で導入されることとなったわけである。

2. 学生への様々な「教育・学習支援プログラム」について

わが国の高等教育機関における学習支援については、形式的には以下のものがある。

1. 入学前教育 2. リメディアル教育 3. 初年次教育 4. 学習支援センター 5. 障害学生支援 6. キャリア教育。

「教育・学習サービス方法論」としては、

1. 協同・協調学習 2. eラーニング 3. サービスラーニング(科目内容のさらなる理解と学問領域についての幅広い認識、コミュニティのニーズに合う活動) 4. 学生サポート、等がある。^{注3}

以上をより解りやすく総合的に箇条書きにすると、

- ① 補習(リメディアル教育)
- ② 入学前教育
- ③ 初年次教育(カリキュラム・プログラム開発)
- ④ 授業内容の質問など日常的学習支援
- ⑤ レポート・論文作成の技術指導
- ⑥ 学習障害を有する学生への支援
- ⑦ 授業支援(教育実践活動：FD)
- ⑧ 資格取得への支援(エクステンションセンター的役割)
- ⑨ 成績不振などによる潜在的離職者への離籍防止対策
- ⑩ 学習スキル向上のための支援など。

※近年では、学習支援センター同様、⑥の枠組みを拡大した「発達障害学習支援センター」も現われてきている。^{注4}

①④⑥の具体例として、以下の例が挙げられる。

大阪国際大学では、教員一人が受け持つ学生を約10人に絞った小人数セミナー(ゼミ)形式で、2014年度は教員16人が、毎週水曜日の1.2時限目に一斉に授業に取り組んでいる。共通のテキストとして『大学、学びのことはじめ』(ナカニシヤ出版)を出版している。学生生活や学習方法などを指導するテキストは市販され、他大学や

専門学校などでも利用されている。そして大学生活のゴールとして待ち構える卒業論文と就職に到達するために不可欠な読解力、文章作成能力などを、ステップを踏みながら身に付けられるようになっている。学生に一台ずつ支給されたタブレット端末を使った3教科を小学5年まで遡り、端末に表示された問題を解きすすむものである。」^{注5}

高校までの学習・勉強が不十分である学生にとって、これらの補習は欠くべからざるものであるが、制度的にしっかりとしなければ、学生にとって継続は難しいだろう。このためには、「図書館」「学習支援センター」など既存の（短期）大学組織を大いに活用すべきだろうし、到達度学習で有名な、「公文式」などの手法も大いに取り入れるべきである。また教員の「知恵を愛する」姿勢も、学生にとっては大きな影響を与えることになる。このように「教育」と「研究」は一体化しており、分離されえない。この論文の表題となっている「研究ベース型学習支援」というものが、主唱される所以である。

3. 先端的なICT教育

- ① 立教大学の場合：立教バーチャルサイエンス（RikkyoV—Ccampus）という名前で、最新のインターネット技術を使った研究、教育用基情報基盤を整え、学生生活を支援している。これにはwebサービスやメーリングリストの利用、スマートフォンとの連携が可能な、お知らせ機能などのコミュニケーションサービスのほか教材や参考資料「授業支援サービスやEラーニングサービス、インターネット経由で自分の資料へ自由にアクセスできるサービスなども提供され、時間や場所の制約なくICTを利用できる環境が整備されている。ラーニングスペースという学習スペースが各所に設置されるだけでなく、キャンパス全域に整備された無線LAN環境により、貸出しパソコンを利用して自由にICTを利活用できるようになる。
- ② 立正大学：立正大学経済学部2010年からICT教育として「クリッカー」（「オーディエンス・レスポンス・システム（ARS）」のこと）を導入としている。授業中、小テスト・理解度測定などに回答すると、結果はリアルタイムで

集計され、パソコンの画面上に映し出される「双方向的授業」を実現している。クリッカーの活用範囲には、「小テスト実施」「アンケート調査」「リアルタイム理解度」「自動出欠管理」がある。

- ③ 「女子栄養大学」：女子栄養大学は、ウェブサイトで大学の講義や資料などを一般に公開する「オープンコースウェア」を開設している。MWS（Media Work Shop 略称）は「じゅうもんじ、Do you Kanji?」をモットーに、大学のありのままの姿を宣伝する活動を行っている。活動は学生のアイデアで、番組放送・CM製作・映像編集・Webなどいろいろなメディアで展開している。^{注6}

さて次に、『日本オープンオンライン教育』、から初の講座「日本中世の自由と平等」が開講された。これは東京大学・早稲田大学・慶応大学の教授による「無料オンライン講座（MOOC＝マッシュ・オープン・オンライン・コース）」である。大学で学ぶには、入学し授業料を払って講義を聴くことが一般的だったが、MOOCが普及すれば、遠隔地からでも、働きながらでも、年齢に関係なく、必要な勉強ができることになる。MOOCの動きは、大学教育にも少なからず影響を与えていくであろう。MOOC事務局長の山内祐平は、対面授業をする大学教育について次のように述べる。

「従来の大学の存在意義は、講義で知識を提供することにあった。だが、それがネットで手軽にできるようになれば、対面の授業ではより高度な内容が求められるようになる」^{注7}

つまり（短期）大学教育は、私大の4割が定員割れしていく中で、学生が授業準備を十分行い、授業の中ではグループ学習などを十分取り入れ、教育の効率を高める、学生の予習・復習を前提とする「反転授業」などにより、より高度化していくであろうことが予想される。

4. 学生の学習における認識論的問題点

4-1 「暗黙知」と「形式知」を統合すること

暗黙知と形式知の分裂は、以下のような叙述からも説明されるだろう。現代の若者の「暗黙知的次元」（無意識）と「形式知」（意識次元）は、統合されず、分裂している。人間の心の深い部分と

鮮明であるが浅い意識の部分が統合されないのである。

例えば、マルクス主義を例とする「大きな物語の凋落」という現代の若者の現象は、現代の認識論的時代状況をよく特徴づけている。

20世紀の後半は、そもそも日本だけでなく、世界的に二つの時代に挟まれた大きな変動期だった。「大きな物語」から、細々としたパラノイア的な設定を必要とする「小さな物語」の乱立に特徴づけられるようになった。

そしてこのような状況では、この時期に成熟した人々に、大きな負担を与えることになった。

アニメ『エヴァンゲリオン』の監督を務めた庵野秀明は、最初から本編以外二次創作出現を予測し、むしろその生産を奨励するかのような仕掛けを原作内に大量に配置している。この作品とは、ひとつの「大きな物語」ではなく、むしろ視聴者の誰もが勝手に感受移入し、それぞれ都合の良い物語を読み込むことのできる、物語なしの情報の集合体だったのである。このように、小さな物語の背後にありながら、もはや決して物語性をもたないこの領域を、「大きな物語」と対比させて「大きな非物語」と呼べるだろう。

このような解離的な心の動きは、読者によっては理解しにくいものである。

近代の小説においては、主人公の小さな物語は、必ずその背後の大きな物語によって意味づけられていた。小説は、ひとつの結末しかもたず、またその結末は決して変えてはならなかった。対してポストモダンのノベル（小説）ゲームにおいては、主人公の小さな物語は意味づけられることがない。それぞれの物語は、データベースから抽出された有限の要素が偶然の選択で選ばれ、組み合わせられて作られたシュミラークル（オリジナルなきコピー）にすぎない。

シュミラークル（オリジナルなきコピー）の水準で生じる小さな物語への希求とデータベースの水準で生じる大きな非物語への欲望の間のこの解離性こそ、ポストモダンに生きる主体を一般に特徴づける構造だと考えられている。ポストモダンの時代においては、世界は、小さな物語と大きな非物語、シュミラークルとデータベースの二層構造で捉えられる。そしてそこでは、深層に大きな物体がない以上、生きる「意味」を与えるのは、

表層の小さな物語だけである。データベースは意味を与えてくれない。大きな物語をもたず、データベースしか持ちえない、新たな人間を、「データベース的動物」と名付けられるだろう。

近代の人間は、「生きる」渴望を満たすことができた物語的存在であった。

シュミラークルの水準での動物性とデータベースの水準での人間性の解離性、超越性の解離で特徴づけられる、現代人、つまり現在の学生たちの認識的・心理的状況は、さらにどうなっていくのであろう。彼らは「人格の統合」なきマス（群れ）なのであろうか。そこには前時代に見られた「理想的若者像」はない。^{注8}

3-2「暗黙知（意識）」と「暗黙知（無識）」の統合を阻む「見るなの禁止」を解くこと「癒し」と「学習」の統合について

「見るなの禁止」^{注9}とは、「きれいごと」「見て見ぬふり」「臭いものに蓋」「言わぬが花」などの様々な日常的問題を、社会の政治から個人の神経症的傾向のレベルまで生んで、何物かの差別感情共謀にまでつながっていくものである。ある種の心理的・社会的統合が必要ではなかろうか。なぜそのような統合をめざすのか。それは、そのような統合以外には、私たち日本人の心にかかっている根強い「見るなの禁止」を解くことができないだろうと考えるからである。しかし北山修も述べているように、一千年以上も続いたその神秘的悲劇を解消することは容易ではない。小手先の空論が通用するほど甘くはない。なぜならそれは、一千年以上の歳月を経て、なお射抜くことができない堅い心の鎧にメスを入れることであるからである。それは引き続き北山の表現を借りれば、「この国」と「亡き母の国」に分裂した日本神話を再統合する可能性を探ることであるし、「社会（理性・意識）」と「心理（非合理性・無意識）」を統合し、「形式知」と「暗黙知」を統合することを意味することでもある。

4.「研究ベース型的高等教育」の再興について

芦川宏直は、朝日新聞(2014. 11.27 火17版)『脱・点数主義の罟』という記事の中で現代の教育を批判して以下のように述べている。

「問題は、科目ごとにバラバラの概論教育や選択

科目ばかりで『どんな人材を育てるか』という一貫した積み上げ型のカリキュラム、つまりストーリーがないことです。暗記主義教育に対置されるのは人物主義ではなく、『時間をかけてより深く専門的に理解させる』教育です。それが学ぶ喜びにつながり、主体性のある人間を育てるのです。上記のような意見は、旧来より多くの学者・研究者より主張されたことである

現在の日本の教育界、学会などは、改革が進みつつあるとはいえ、「部分最適型」の集団・社会であり、良い意味でも悪い意味でも特殊な社会である。日本社会・日本人の社会的性格を表現する際に、よく表現される「間人社会」は、その典型である。

「間人における自己システムは」は、共有生活空間の中で、たまたま『自』らに割り当てられた『分』をいい、そこでは、最初から無条件で存立するような自己システムは、設定されていないのである。「間人」間での関係のあり方は、自他間での完結した「社会関係」(social relation)とは違う。また人為的な契約問題とも異なり、「間柄」とでも表現すべきものであろう。「間柄」は、たしかに社会生活での対人関係を確かにする。あるいは、円滑にする機能が備わっているが、一方、「進化する社会・人間関係」のなかで働く「創造的革新」を阻害する面もあることは忘れてはならない。このような観点から、日本は、新しい「民主的社会」を構築する責務を負っているのではなからうか。

5. 未来からの高等教育と(短期)大学図書館の役割

Web図書館には、(短期)大学図書館ではないが、例えば、千代田web図書館がある。これは、WindowsPC、I Pad からWeb図書館サイトにアクセスしてコンテンツを閲覧することができるインターネット上の図書館である。コンテンツには、「電子書籍」「Flash」「Audio Book」「動画」の4種が存在する。

web図書館の「導入理由」としては、図書館外部から24時間365日のサービス提供が可能なことである。夜遅くまで仕事をしていて、来館が難しい利用者にもサービスができる。これまで提供が困難であった資料も蔵書可能になる。さらに蔵書スペース制限の解消もある。その他、電子書籍

には、紛失や延滞がない。区や図書館で開催したイベントパンフレットをPDFで作成すれば、Web図書館で公開できる。このように、わが国もようやく消費者向けの電子書籍が、立ち上がりを見せているが、図書館向けの電子書籍は、米国と比べて何年も遅れているといわれる。

わが国での電子書籍システムの貸出し数は、合算して月3,000件程度と思われる。この2～3年、出版社と図書館の間にはさまざまな軋轢が発生したが、現在解決方向が見えてきた。現在、出版社の売り上げに占める図書館割合は、10%程度である。図書館利用が紙から電子に移っていくことになるだろう。^{注10}

5-1 短期大学図書館の「開かれた活動」

まず、今治明德短期大学が今治青年会議所と共催した『心の絵本選手権』(2008～2010)を挙げてみよう。

この短期大学は、学生数300名程度の小規模であるがゆえに、この催しを事例として参考にしつつ、小規模短期大学の図書館力向上のために、地域組織・資源とどのような連携が可能・有意義であるかを推察できる。

2003年(第1回)～2007年(第5回)

までの観客数は平均500名程度で、今治市営の各文化ホールにて開催されていた。第5回を機に今治市営の各文化ホールにて開催されていた。第5回を機に今治青年会議所メンバーは、大会見直しをかけ、予選とweb審査・コンサートなどとの同時開催を試みた。マスコミ各社・今治市役所・幼稚園関係者・地元NPO団体を交えた会議を重ねた結果、拠点づくりと他団体との連携の強化が課題としてあげられた。

成果としては、以下の事が挙げられる。

- ① 明短・地元行政・多くのボランティア団体が結びつくことで、連携共同運動が高まり、『心の絵本選手権』だけでなく、他のイベントでも協力関係が活かされた。
- ② 元来、閉鎖的だと思われていた学校図書館が、『心の絵本選手権』を機に、学外の諸団体と共同事業を行うための学内のパイプ役となり、活動範囲がひとつ広がったように思われる。
- ③ 図書館とは、知識・情報を提供する場所である。しかし、利用者が、その知識・情報を活

かして、知恵にかえ、行動に移して初めて図書館の役割は果たされる。短期大学図書館は今や単館だけで情報を活用していくには限界がある。

- ④ 学生と地域社会のための知識の創造基盤を成す組織として、常に情報蓄積・情報発信をし、「知識」「文化」「情報」「行動力」の循環に積極的に参画する。また地域住民の多様な生涯学習活動を支援していく事も必須である。また、(特色)を活かした合同イベントを開催したり、各図書館のお宝を巡回図書館として提供しあい、図書館並びに他の地域社会との交流を深める事も進みつつある。^{注11}

また小規模短期大学図書館の別例として、「長崎女子短期大学図書館」^{注12}がある。所蔵蔵書は、約48,000冊である。ここも果敢に様々なイベントを催している。

イベントとして例えば、①、「図書館クイズ」 ②「アロマとハーブの展示」 ③「Book横町」学園祭で処分する雑誌や教職員から集めた図書などを無料配布している。④「学生による図書選定」 ⑤「手遊びコーナー」「読み聞かせコーナー」 ⑦「DVD放映コーナー」など等である。

以上のようなイベントだけでなく、日常の図書館活動の中においても興味深い活動がある。例えば千葉経済大学短期大学部の「インターネット情報へのアクセス指南」、岩手看護短期大学の「Library News」を利用した学習支援、愛知甲南短期大学の「実習に関連した図書の紹介」、大阪芸術大学「図書館空間の演出活動」など等がそうである。

5-2 最先端の大学図書館について短期大学がそこから学ぶもの

短期大学図書館といえども、最先端の大学図書館に劣っていないということはなく、やはり最善のものを目指すべきであろう。学生の学習能力を考えた場合、ある意味では、ハード面とソフト面でより充実した施設が望まれるかもしれない。

最先端の大学の図書館の機能として、「ラーニングコモンズ」が挙げられるだろう。ラーニングコモンズとは、学生がグループ研究やコンテンツ制作、論文の書き方など、学習に必要な人的支援体制を備えるケースである。こうしたスペースが

大学図書館に設けられるようになった第一の理由は、学習の仕方の変化にある。しかし二番目の理由として、資料の集積庫という物理的な図書館の役割が、デジタル化によって揺らいでいることも事実である。先進事例の多くがよっている北米の大学図書館では、ジャーナルの電子化とは別に、グーグルブックスによる蔵書のデジタル化プロジェクトが進んでいる。2004年の発表以降、ミシガン、シカゴ、イリノイ、ハーバード、プリンストンなどの有力大学が次々に参加しており、あらかたの書籍はデジタル化されたのではないかと考えられる。グーグルブックスについては、プロジェクト参加校がコンソーシアム(Hathi Trust)を組織して問題解決にあたり、プロジェクト非実施校へのデータ提供なども始めつつある。そうすると中小の大学図書館は、自前で本を集める必要がなくなるわけである。

日本の先進的な大学図書館の事例を二つ挙げてみよう。

まず、立教大学池袋図書館であるが、コンセプトとして、次の4つが挙げられる。①滞在型の図書館 ②バリアフリーの図書館 ③グループワークの図書館 ④学習支援の図書館、である。それに加え、学生生活の中心が図書館となるよう、いくつかの工夫を取り入れた。1. 蓋つきの飲料の持ち込み許可 2. 軽食の許可 3. 携帯電話の許可 4. モバイル機器充電の許可 5. バリアフリーの図書館等などである。

長時間滞在型の図書館という大学図書館で最も求められる役割を考えた場合、従来のクローズドした図書館の決まりが、ことごとく翻させられていくのは必然といえよう。しかしこれらのものを充たす図書館の空間的配置は、たいへん重要であろう。大学図書館の最も重要な「学習支援」という業務についても、三つの主要な支援を行っている。①図書館職員によるファレンス、②大学院生によるラーニングアドバイザー制度、③学部生によるコンピュータヘルプである。^{注13}

もう一つは、「国際教養大学(Akita International University)」である。この図書館は、24時間365日オープンという典型的な「滞在型大学図書館」である。学生・研究者にとって、こんな有難い図書館はないであろう。いうまでもなく、図書館は知のシンボルであり、知の実践機関でもあるから

である。

この大学は、全学で約870人という、小さな単科大学であり、全学生の85%がキャンパス内に住んでいて、かつ一年間の留学が義務付けられている。毎年約180人が留学したり、提携校から日本に留学するという特別な大学であるが…。

またプレゼンが苦手、レポートの書き方がわからない、という学生たちに対して、「学習支援センター (Academic Support Center)」で、上級生大学院生、留学生たちが個別指導をしている。さらに「アカデミック・キャリア・支援センター」を設置して、国内・国外の大学院への進学を勧めている。^{注14} これらのグループ学習は「ラーニング・コモンズ」と称して、大学図書館では、また短期大学でも、これからは必要とされるであろう。なぜなら、短期大学は修学年数の短い、達成度の低い大学ではなく、目標のはっきり定まった、専門的な学習機関であるからである。

5-3 未来からの図書館とは？

「ビッグデータ」を扱いつつ

「触発する」図書館とは？

発信する図書館 教員の研究力・
教育力の向上を目指して

未来の図書館とは？と聞かれて誰もがまず思い浮かべるのが、言うまでもなく「電子図書館」である。これは現代のIT（情報技術）化によるコンピュータ・データベースを利用したウェブサイトによる図書館である。また電子データベースの充実した図書館や、インターネットから蔵書の検索・予約などができるシステムが導入されている図書館も、電子図書館とよばれる。いうまでもなく物理的な境界はないし、24時間運営、検索が容易でスムーズ、低コストであるなど、長所は数多い。おそらく未来からの図書館の主たる流れは、この方向であろうと思われる。

そして未来の図書館のもう一つの流れは、古代アレキサンドリアの図書館が一つのヒントを与えてくれる。これは、古代にはここを訪れれば、すべての学芸に通じることができたといわれる、幻の図書館である。70万巻もの美しい蔵書、癒される植物園、珍奇な動物園、贅を凝らした天文台、美麗なる大劇場と公共浴場、深夜も煌々と輝くファロスの灯台と、まさしく学芸の都だった。^注

¹⁵つまり様々な人々が集まってくる社交の場、言いかえると、「触発する図書館」というものであった。大串夏美氏の言葉を借りるなら^{注16}、「知の参照」から「知の創造」へ「均質な大空間から多様な空間の集合へ」「静寂性を超える新しいツール」「リアルな空間としての図書館」「情報収集から情報発信の場所へ」「活動と情報の複合化」「メディアの複合化」「網羅的情報から専門的情報へ」「地域の個性を表現する」という現代図書館の最先端目標を、ある意味で具現化したものであったのかもしれない。

そして、これらの諸目標を最高度に達成するためには、実は初めに記したように日常生活のデジタル化が、着実に進んでいく必要がある。「電子図書館」と「触発する図書館」は相矛盾するものではないと考えられる。ところで現代の図書館建築を見ると、全般的に機能主義的な、管理を主眼とした図書館建築から、利用者中心の図書館建築へとトレンドは移行している。つまり居心地の良い図書館が求められている。また同時に図書館は、前述したように、「触発する」「インスピレーションをかきたてる」空間でなければならない。

心理学用語に「アフォーダンス」(affordance)という語がある。これは、情報とは環境そのものの中に存在すると考えられる。そして寛容世界には様々な情報が実在している。情報とは、知覚者が意味づけをしているのではなく、環境から、自分にとって価値ある情報をピックアップするものと考えることができる。

上記の意味で、各図書館は、それなりに分野性・専門性をもつべきではあるが、図書館を訪れる利用者が、そのつど図書館という空間・環境の中で、各々が自由に、インスパイアされるべき場なのではないだろうか。

古代のアレクサンドリアの図書館は、実は、カリオペー（叙事詩）、エウデルペー（抒情詩）、エラトー（恋愛詩）、メルポメネー（悲劇）、クレイオー（歴史）、テルプシコレー（舞踊）、ウーラニアー（天文、占星術）、ポリュヒュムニアー（音楽と幾何学）という九女神に関する研究所の付属図書館であったことを考えるとまことに興味深い。これら九女神の力を借りて、そこで人々はインスパイアされたのではないだろうか。

生活の質を変えるという価値目標へ人類は向か

わねばならない。社会を、あるいは世界を変えたいという情熱は、自らの存在意義を突き詰め、困難に立ち向かう強い個性を持つ人たちに宿る。現状に甘んじる多くの人や組織の中で、「出る杭」となる人たちを育てなくてはならないゆえんである。つまり知恵と力を持った人たちである。

このような知的に野心的な人々は、必然的に膨大な情報、つまり時間と空間に限界づけられない「ビッグデータ」を求める。さて、ビッグデータとは何であろうか、ビッグデータとは、どの程度のデータ規模かという量的側面だけでなく、どのようなデータから構成されるか、あるいは、データがどのように利用されるかという質的側面において、従来のシステムと違いがある。それはマルチメディア・データ、ソーシャルメディア・データ、カスタマーデータ、オフィス・データ、ログ・データ等の総合である。従来のデータとそれを比較するなら、「構造化－非構造化」「内部－外部」「サマリー－ファクト」「精度－速度」の対比で示されるだろう。このような下手をすればカオスに陥るような巨大情報から、特定の仕事・プログラムに適切に秩序だった、「情報」「教育」「研究」をいかに構成していくかが、学生と教師・研究者が、図書館という場で行っていく協同作業なのではないだろうか。この作業は言い尽くせないほど多岐にわたるものであり並はずれた集中力を必要とすることはいうまでもない。

6. 最後に

学生の「癒し」と「学習」を求めつつ

学生の「能力開発」には、必ず精神的な危機が伴う。しかしその危機を超えないことには、能力開発も、そもそも「人間の成長」はありえないだろう。学生たちも、多かれ少なかれ、「世代間連鎖」「遺伝的な病い」「不幸な幼児体験」をもっている。「白雪姫」「シンデレラ」にみられるような、「継母」や意地の悪い「姉妹たち」の妨害や「七人の小人たち」という、善意の第三者の行為現象は、おとぎ話の世界だけでなく、人間世界の現実にも起こり得ることである。

そしてそれらは、(短期)大学という場でも教師と学生を巻き込んで起こっているのである。(短期)大学教育は、学生たちの喜びを受け入れ、苦悩を支えつつ、「能力開発」「成長」を促すもの

でなければならないだろう。

(引用文献)

1. 荻谷剛彦 『教育改革の幻想』 ちくま書房 2002年
2. 朝日新聞 2014年4月11日 3面
3. 小山田耕二他著 『研究ベース学習』 コロナ社 2011年
4. 小田隆治他編著 『学生主体型授業の冒険』 ナカニシヤ出版 2010年
5. 朝日新聞 2014年4月26日 6面
6. 毎日新聞 2014年3月25日 15面
7. 東京大学新聞Online 「オンライン授業を教育にどのように活かすか」 www.utnp.org/news/konwakai.html 2014年2月15日
8. 東浩紀 『動物化するポストモダン－オタクから見た日本社会』 講談社 2006年
9. 北山修・橋本雅之 『日本人の原罪』 講談社 2009年
10. 千代田web図書館 <https://weblibrary-chiyoda.com/about.php> 2014年2月17日
11. 『第7回全国高校心の絵本選手権』 awards.jaycee.or.jp/cgi-cib/hosho/tiles 2010/0341_02.pdf 2014年2月10日
12. 長崎女子短期大学図書館 www.nagasaki-joshi.ac.jp 2014年2月8日
13. 立教大学図書館 www.rikkyo.ac.jp 2014年2月16日
14. 国際教養大学図書館 web.aiu.ac.jp 2014年

2月10日

15. 『古代アレクサンドリア図書館－よみがえる
知の宝庫』 中央公論社 1991年
16. 大串夏身他 『触発する図書館』 青弓社
2010年